

シャツの胸ポケットは「あり」でいい 最後はスーツ2着でいい

10年ぶりにシンガポールに行ってきた。巨大ビル群やアーナな建築が立ち並んで刺激にあふれ、世界中から人を引き寄せ、いたるところで活況を呈していました。

世界経済を動かす金融センターのひとつ、シエントンウェイで、ビジネスマンの服装を観察しました。年間を通して平均気温は28度前後という熱帯の金融マンのビジネススタイルはといえば、白か薄いブルーの長そでシャツ、ネクタイなし、ダークカラーのトラウザーズに革靴、という組み合わせが圧倒的多数でした。半袖シャツはビジネス街では見かけません。ジャケットを着ている人も見かけませんでした。オフイスのどこかに置いているのかもしれないませんが、通勤途上のビジネスマンもジャケットはなし。

シャツには胸ポケットがつき、胸ポケットにもトラウザーズのポケットにも小物がぎっしり入っている姿はクルビズ期の日本と変わりません。「スーツの下に着るシャツは本来、下着なので胸ポケットをつけるべきではない」という論争はかねてから根強くあ

りますが、そういった原理原則が通用するのは、北米やヨーロッパなど、涼しい地域だけです。現実問題として、熱帯や亜熱帯では、シャツが「上着」として着られています。ジャケットの内ポケットに入れるべきものを、どこかに収納しなくてはならないということを考えて、やはりシャツの胸ポケットは必要なのであらうと思われまます。

原理原則のつとめた「正しい」服の伝統を守るために人は生きていくわけではありません。服はやはり、人の仕事や幸せに役立つものであるべき、という見地に立つと、熱帯・亜熱帯でのシャツの胸ポケットは「あり」でいいのではとあらためて思いました。モノを詰め込み過ぎて見苦しくなってしまうのはまた別問題ですけれどね。

人のふり見てわがふり……と、いうわけでもないですが、モノを詰め込み過ぎ、持ちすぎることを見苦しいだけでなく、快適な行動にとつてもマイナスになります。今回の旅では、服や下着は最低限の数だけ持参し、ホテルのランドリーサービスを利用して着

回してみました。買い物も、日本で見かけないアラブ香油の小瓶を2つ買ったばかりは、一切なし。行きも帰りも軽々と快適で、買いたい物がない分、より多くの経験ができ、充実した旅になりました。味をしめたので、これからは日常生活でも携行品を極限まで減らしていこうと決めた次第。

思えば、ココシャネルは人生の最終章にたった2着しか服を持たなかつたのですよね。色違いのシャネルスーツ。それを交互に着ていけば十分という境地に至ったのです。服にふりまわされるために人は生きていくわけではない。やはり服は限られた時間の人生や仕事をより快適に豊かにするためにあるべき。そういう基準を確立すると持つべき最低限のモノも明確になります。とはいえ、シャネルがそうであつたように、おびただしい数の服とつきあつてみた晩に、ようやくそういう境地が訪れるものなのかもしれない。美食の限りをつくした人が、人生最後の食事は「炊きたてご飯とみそ汁」だけでいい、と言つてみたいなそこはかとなしいヤミ感もちょっとだけあるね。

なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。株式会社Kaori Nakano代表取締役。服飾史家・エッセイストとして研究・講演・執筆をおこなうほか企業の顧問教授を務める。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書『紳士の名品50』（小学館）、『モードとエロスと資本』（集英社新書）ほか。監修した新刊『服を味方にすれば仕事はうまくいく』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）が発売。



Kaori
Nakano